



第59号

平成17年(2005)

4月25日発行

(年4回発行)

根を切れ、続きをいくな

青木秀樹

猫養会がACC「連句実作と理論」受講者だけの会から、現在の蕉風連句を学ぼうとする方すべてに開かれたのは、平成二年七月であった。このところ猫養ホームページなどのルートで猫養会に関心を持たれ、入会される方が続いている。仲間内で連句を巻いているが、ちゃんと勉強したいということで入会される方もおられる。新人会員がいて会の発展が図れるわけでありがたく思うが、一方猫養会として責任を感じざるをえない。

連句の基本が「付け」と「転じ」にあることは、古く連歌の時代から変わらないが、付けの手法は変化している。貞門俳諧は物付け(詞付け)談林俳諧は心付け(意味付け)、そして蕉門俳諧は余情付けをよしとする。余情付けとは、前句の余情と付け句の余情が適応

するように付けるということ、句意以外の勢いや情緒が二句の間で映発し合って余情が表面に匂い出すのがよい付けということである。初心の頃は誰でもこの「付け」の感覚に悩まされる。付けの距離感がわからない。

そこで、東明雅先生が、師である根津芦丈翁から教えられた「付けの心得三箇条」の①根を切れ、続きをいくな、について『ねこみの通信』第五号(平成三年一月)で説明されているので引用したい。

その文は、まず「山襖」第七号に掲載された芦丈翁自筆の文献の紹介からはじまる。

甘汁 苦汁

芭蕉の俳諧は、前句をよく味わって後付け句を考えるべきである。前句の時、場、所、季節、昼夜、晴雨、寒暖、人であれば、自己、貴賤其他等をよく考え、爰と云うたしかな句のあり処を見きわめて、後前句の取材や言葉に継らず、放れて付けを求めめる。此事を「根を切れ」「其の続きを云うな」と教えている。

種井凌へる里方の隙

鮒脍素人料理よく出来て

五人八人の里方の人が井凌いをして、鮒が取れたから之を脍につくって、一杯やろうという処である。一句立ちはよくして居るが、大きな根があつて、蕉風の絶対嫌う付方である。

我ながら今度の世話は仕あてたり

十分にみて戻る祇園会

とく出しておいた団扇のまだつかず

嫁か婿かの媒人をした。思ったよりも佳い家であつた。祇園会に招待され、十分の歓待をうけ余すなく見物させて貰った。土産に貰ったかの団扇を出しておいたがまだ着かぬ。と其続き続きと付け進んで居る。是等は芭蕉の俳諧を全然知らぬからのことである。これが当時日本一と云われた花の本芹舎の作であるから驚く。

その後にく明雅先生の説明。

「種井」と「鮒脍」とは物付であるが、この付合では単なる物付というだけでなく、この人達が、井凌いをして、その次に鮒料理をしたと、その行動が続いている。ただ単に物付ならば芭蕉の作品にも多く用いられ、別にして問題ではない。種井を凌へる行動と料理を作る行動とが、余りに近い。直接結びついている。そのことがまずいのである。

小学生の作文を読むと、たとえば「私はけさ早く起きました。そして顔を洗いました。それから学校に行きました。」といった調子のもが多い。この、そして、それからの続くような付合は困るのである。

前句と付け句の間には、はっきりした断層・距離が必要である。断層・距離のないものは親句と言ひ、あるものを疎句というが、疎句によい句が多いというのは、連教師心敬の言葉である。根のある親句を避けるよう、我々も心がけねばならない。

「付け」と「付味」

東 明雅

今度、富山の大会の応募作品を審査して感じた事が二つある。まず第一に募吟が歌仙形式であった事、従来の国民文化祭では審査員の労を省く意味で、半歌仙が主であったが、今回、歌仙を採用してはじめて連句ということに、完全な形で審査する事が出来た。ことに連句の芸術性の重要な要素である一卷の展開、序・破・急、ヤマ場を完全な形で審査することが出来、大変ではあったが、一種の満足感と充実感を味わったことである。

それにしても歌仙六百三十巻を審査するのは大仕事である。皆さんが一所懸命、苦心して作られたものであるからと思つて、こちらも目を皿のようにして読むのであるが、なぜこの句がこの前句に付くのだろうかなどと考えると、だんだん分らなくなつて、頭が錯乱し朦朧となつて来て、遂には眠くなつて来る。かくてはならじと頑張るのだが、また五巻か十巻も読まぬうちに頭が混乱して来る。だから、そんな時は「猿蓑」の「市中は」の巻か、「鷹の羽も」の巻などを取り出して読むことにした。これらを一度読めば忽ち頭の混乱もおさまり、眠気も吹き飛んで行くのは不思議だった。これは鬼殺しみたいな強い酒ばかり呑まされ悪酔していた体が、灘の生一本を呑ん

で生き返るようなものなのであろう。とに角、現代連句一般の付け方は難解で、まだ成熟していない。これが第二の感想である。

考えてみると、芭蕉やその一門が、精魂を込めて励んだのは、連句の付けに関するものであった。余情付(句い付)という画期的な手法を發明した芭蕉が、その実作にあたっていかに厳しい指導を行なつていたか。それは「去来抄」にくわしく書き残されているが、私どもはどれほどの努力と苦心を払つただろうか。忤怩たるものがある。

私自身、連句は「付け」と「転じ」を双輪とする文芸であると認識しながらも、この「転じ」というものの存在が、連句をして世界の文芸に比類のないものとする特徴であると考え、「自」・「他」・「場」の区別による手法を採用して、現代連句を本当に連句の名に値するものたらしめるように努力して来たつもりである。その考えは決して誤つてはいなかつたが、勢い「付け方」の研究はやや等閑にした感じが無いではない。

また一方において、現代詩人達に依る連詩なるものが流行して来た。その先駆者を私は松本の信大連句会の有力メンバーであつた高橋玄一郎氏(一九〇四—一九七八)であると考へている。同氏は前句に全く反する、極端に異なつたものを付句とする方法に「矛盾付」という名前を付けられたが、これは西脇順三

郎氏などが考えられた詩の手法にも似通つており、遠く遡れば藤原定家などの「疎句に秀句多し」という考え方も共通するものではなからうか。これらの影響も大きいと思ふ。

詩の世界だけでなく、俳句の世界にもわけの分からない句を作る、いわゆる前衛俳句が流行している。そう言えば、抽象絵画・前衛彫刻、それらは世紀末の現代芸術全般に共通した傾向であらう。しかし、詩にせよ、俳句にせよ、絵画にせよ、彫刻にせよ、それらはすべて、個の芸術であり、見る人・聞く人が分かるうが分かるまいがそれは勝手である。しかし連句は連衆という複数の作者による作品であるから、すくなくとも連衆の間だけに、十分理解されることが必要であらう。

去来は「付句は付かざれば付句にあらず」と言っている。とも角私は今後、「転じ」とともに「付け」にも連句研究の重点を置き、芭蕉の付け方を再吟味するとともに、現代連句にふさわしい新しい付け方と付味を考えていきたいと思ふのである。

猫蓑通信第二十四号より転載

井波から武生へ

二村文人

今年は、北陸で連句の全国大会が二つ企画されています。七月三日の「全国連句いなみ大会」と、十月三十一日の「国民文化祭・ふくい」です。

芭蕉は、『奥の細道』の旅で、越中を二泊三日で通過してしまいました。後にそれを知って、大変残念に思ったのが、井波の瑞泉寺の第十一代住職浪化でした。浪化は、元禄七年五月に、京都の落柿舎で芭蕉に入門しました。芭蕉は、その年の十月に亡くなっていますから、生前に対面したのはただ一度でした。師の没後、浪化は墓前の小石を持ち帰り、遺族から遺髪を譲り受けて、翁塚を建立しました。また、文化七年には黒髪庵が建てられて、諸国を行脚する俳諧師たちの交流の拠点になりました。『若丈翁俳諧聞書』に、上州の下平可都三と越後の流芳が、ここで落ち合い、二時間二巻満尾したという伝説が紹介されています。

浪化は、元禄十六年に三十三歳で亡くなり、一昨年没後三百年を迎えました。また、井波町は昨秋近隣の町村と合併して南砺市（なんとし）になりました。今回は、浪化三百回忌と新市誕生を記念した催しでもあります。当日は瑞泉寺、前夜は黒髪庵で実作をお楽しみ

下さい。殊更目新しいおもてなしはしません。が、木彫刻のみとつちの音が響く石畳の街の雰囲気味わっていたきたいと思います。

武生市は、大化の改新の頃に越（こし）の国の国府が置かれた古い町です。また、紫式部が越前の国司に任命された父の藤原為時とともに、一年余を過ごした土地でもあります。平安朝の庭園を再現した紫式部公園からは、式部も日毎眺めたはずの日野山（ひのさん）の美しい姿を仰ぐことが出来ます。『奥の細道』の敦賀の条に、「漸白根が嶽かくれて、比那が嵩（だけ）あらはる」とある比那が嵩が日野山のことです。また、「あすの月雨占はんひなが岳」（『荊口句帳』「芭蕉翁月一夜十五句」）の句を残しています。福井から武生を経て、芭蕉が敦賀へ着いたのは、陰暦八月十四日でした。「その夜、月殊晴たり。『あすの夜もかくあるべきにや』といへば、『越路の習ひ、猶明夜の陰晴はかりがたし』と、あるじに酒す、められて（中略）十五日、亭主の詞にたがはず雨降」と『細道』に記し、「名月や北国日和定なき」と詠んでいます。北陸へお出かけになるときは、雨具をお忘れなく。

去年のプレ大会の折に、小林しげとさんや大野鶴士さんと、領主本多家の菩提寺になっている龍泉寺を訪ねました。この辺りは、京町と言つて、多くの寺院が集まり、武生の歴史を感じさせる一画です。皆さんがおいでに

なる頃は、丁度「たけふ菊人形」が開催されています。また、俳優の宇野重吉が好んだ名物のおろし蕎麦も、新蕎麦の出る時期です。

国民文化祭は、これから本格的に準備が始まります。福井と富山は、間に石川県をはさんでいるので、私がお手伝いをすると言つても、月例の実作会に出かけるのがせいぜいですが、事務局の懸命な努力により、短時日に地元メンバーが二十数名になりました。皆さん熱心で、良い人ばかりです。記念講演は、信州大学で東先生の古い教え子の宮坂静生先生にお願いしました（私の遠い先輩でもあります）。松本で『岳』を主宰し、俳句と連句の両方に通じた方です。宮坂先生をお迎えすると、東先生も一緒に来てくださるような気がしています。富山の連衆と福井の連衆は、お互いに行き来して、すっかり仲良くなりました。石川県の津幡や岐阜の皆さんとのお付き合いも続いています。今年の文化祭は、中部圏が大きくまとまるきっかけになりそうです。

福井・石川・富山を北陸三県と呼んでひと括りにしますけれども、実際に住んでみると、言葉も風土や生活習慣も、随分違います。夏の井波と秋の武生へ両方出かけていただいて、是非それを体験して下さい。福井では、冬に水羊羹を食べるというのを、御存知でしたか。

初懐紙源心作品集

平成十七年一月十六日
於ホテルサンルート東京

「写真の夫」

東郁子捌

初懐紙写真の夫も仲間入り

福茶いたたく高らかな声

見はるかす連山の尾根鮮やかに

デイバックにはチョコとメモ帳

昼の月背筋伸ばせる羽抜鳥

僕は蠅で君は蜘蛛だね

新妻は消毒薬の権威にて

モデルハウスの耐震の部屋

FMを聞けばいつでもクラシック

それでも描ける欧州の地図

豪華船べた風褒めて酒を酌み

ミリオネアーはクイズ三昧

天皇賞取りし馬主に花吹雪

帽子ころがる春風の中

発心し遍路の列に加はりぬ

幼い頃から好きな節介

鎌倉で濡れ煎餅を買ひ求め

炬燵で語る戦争の事

くしゃみして策基相手がやって来る

皺の数だけ恋をかさねて

「ああ」と云ひ「おお」と従ふ五十年

団栗の降る故郷の小屋

稲架襖月皓々と照らしをり

鮭一本を料理数多に

郁子

文伸

嫻

淳子

暁巳

有子

巳

伸

嫻

巳

淳

嫻

有

同

巳

淳

嫻

有

嫻

伸

嫻

有

伸

有

たけなはの少年野球声援し

めいっばい出す水道の水

花に酔ひ朱の鳥居を見上げつつ

ゴールデンウィーク夢と過ぎ行く

執筆

連衆 若林文伸 八代 嫻 上月淳子

島村暁巳 佐々木有子

郁 伸 淳

「銀器磨くや」

内田麻子捌

黒ずみし銀器磨くや小正月

ひかり集めて咲く福寿草

一斉に公園の鳩飛び立ちて

とんぼ返りで勇む童

バルコニー嫦娥を仰ぐ森の上

丈なす髪を流す薫風

DNA恋多き血の呼び合ひて

あつけらかんと告げる遍歴

夜毎見る失せ物何か捜す夢

藪の中より猫の鳴き声

大いなる津波に数多鳥飲まる

財布拾へばすべて贖札

見栄切つて千両役者花の下

御室詣の弾むおしゃべり

茶店には青島蜜柑盛られぬて

デジタル万引あるを御存知

連衆

若林文伸

八代

嫻

上月

淳子

島村

暁巳

佐々木

有子

麻子

美保

士郎

政志

碧

同

保

志

郎

碧

昌

志

保

ひたすらに乞食袋をかき廻し

寝酒きりなく思ひ行き来す

何故なんだ何故人妻かとくり返し

天国地獄ああ紙一重

モンマルトル踊り子脚を高くあげ

ロートレックの叩く残り蚊

有明に縄文埴輪の穴うつろ

とろとろ煮つめる鍋の苔桃

古稀すぎて同級会もしみじみと

ブリッジ楽しむ啓蟄の頃

列島の名花訪ねむ北・南

草の枕は夜半もあたたか

連衆 高瀬美保 横井士郎 峯田政志

松本 碧 中野昌子

郎 麻 碧 志 昌 郎 保 昌 保 碧 郎 志

「小正月」

坂本孝子捌

地を癒す程よき雨や小正月

いろはかるたに集ふ面々

携帯の待受画像取り替へて

シオルダーバッグ多きポケット

夏の月ゆらりと揺れて象の背に

大使夫人の誘う籐椅子

ニアミスの垣を越えたる深情

命拾つた木更津の沖

高炉消え職場の友はちりちりに

孝子

弘子

忠史

かりん

靖子

弘

史

ん

ん

蔵書にありし印のくつきり

峡の寺空には鳶の笛響き

点と線とで結ぶ搜索

スクープを祝ふ今年の花見酒

ひと息に吹くたんぽぽの絮

すれ違ひ陽炎崩すひかり号

ヒールキックでシユート決まった

世を仮に過ごす茶髪の整体師

雪菜の育つ庭の片隅

火の用心男用心ワンルーム

貞操帯の鍵は特注

沈黙の臓器の如き永遠の愛

旅の終りは秋の故郷

駒の嶺仙丈の嶺月明し

高西風が来る駆けてゆく兎に

景品のキャラが欲しくて買ふ駄菓子

思いがけずよ御降嫁の沙汰

羽衣の天女は花と舞ひながら

泳ぐ姿に盛りし若鮎

連衆 松原弘子 根津忠史 登坂かりん

関口靖子

「伊勢えび」

倉本路子

伊勢えびの動けばうごく値札かな

呼声高く河岸の初市

路子

雅子

読み進む資料に赤の線入れて

うすきコーヒーゆつくりと飲む

SLの車窓に浮かぶ夏の月

蛩ついでと君の胸もと

ゆきずりの恋はいつしか本物に

津波の去りし海のおだやか

チャイム鳴り合せる犬の歌心

センター街に群る若者

天使の乱舞の森に迷ひ込み

見得を切つたり恰好ついたり

山門の仁王へ届く花吹雪

さえずりいままも下手な鶯

当節は業者まかせの大掃除

ニートの子らの壁の落がき

至福なりひとりぼんやり吸ふ煙草

仏蘭西仕込みの荷風散人

外套の裾石段を払ひゆく

ひとめかまはず化ける女狸

撫でられて抓られてゐる優男

力士の背にキスマークあり

盛りあがる月見の宴の無礼講

占い吉で秋の閑けゆく

研究でわらしべ長者となる夢も

心なごます故里の山

鏡割りお寄り下され花筵

ほほ多み交すうらかな午後

連衆 武井雅子 杉山壽子 山崎一恵

林 壤

壽子

一恵

壤

壽

雅

惠

雅

惠

壤

壽

雅

路

雅

壽

惠

同

同

壽

雅

壽

同

壤

壽

雅

路

壤

「マティスの切絵」

山口美恵捌

初茜マティス切絵の雲遊ぶ

淑気漲る海の南

遠近の両用眼鏡慣れてきて

子供部屋から九九の暗唱

てんと虫ついと跳び入る宵の月

流しそうめん箸が触れ合ひ

物陰の待ちきれなかつた長いキス

ヨンさまカットあな憎らしや

鶏も木に登りたい空飛びたい

団塊世代職を退く頃

酒癖なぞ言はず畏友と酔っぱらふ

ニコライの鐘ロリオンルリオン

花びらの帯と流るる神田川

春の風邪ひく誰に貰ひし

のどらかに天地無用の箱で寝る

年金問題うやむやの沙汰

どこか変議員バッジの謙讓語

しはぶきながら北欧の街

犬糧のわきめもふらずまっしぐら

忠兵衛が切る恋の封印

今も今濡れ場に隕石落つこちて

野分見舞は月の畦道

零余子めし母の手作りふつくらと

アオマツムシの甲高く鳴き

バス停にしばらく覗く系統図

みんなで守れ古い町名

美恵

冬乃

久美子

達子

ゆみを

乃

久

乃

久

乃

久

乃

久

乃

久

乃

久

乃

久

乃

久

乃

久

乃

久

乃

久

乃

達

山峡は花の明りと詣り墓
あたり茫茫黄沙降りつく
久 恵

連衆 百武冬乃 副島久美子 篠原達子
青島ゆみを

「翁の遊ぶ」 高橋豊美捌

舞初に翁の遊ぶカオスかな
豊美

年酒勤むる鳥の盃
健悟

麵麴種の発酵徐々に進むらん
要子

紫色の胸のブローチ
未悠

水着からドレスへ替へる月の海
英子

玉の輿にも飽きてくるころ
悟

坂のぼる車夫威勢よく声あげて
要

二十年代昭和懐旧
豊

天皇の貝類採集にこやかに
悠

髪のうちしろを撫でるそよ風
悟

つぎつぎに新球団のあらはれる
英

ホームページにモナリザの像
悠

花前線氣を揉むうちに遠ざかり
悟

日中韓で黄沙会議す
英

空海忌風信帖をおもむるに
同

蚤の市にもブルドッグ連れ
悟

ノロウイルス介護施設に忍ぶ夜
悠

年金負担じわりじわりと
要

感謝され感謝を返す雪下ろし
英

どんなものでもはひる闇汁
要

たはむれの恋占ひが本物に
悟

シャワー念入り密会の後
悠

だまし絵の木立にかかる昼の月
要

蟋蟀が鳴く胸中に鳴く
悟

ソゴイネルワイゼンひとと冬近し
要

玩具の並ぶ居酒屋の棚
悟

絹を積み馬で超えゆく花峠
悠

緑連なるけふの弥生野
執筆

連衆 佛淵健悟 山本要子 棚町未悠
悠

佐古英子

「初御空」 木村真呂捌

鵬翼の悠揚翔ける初御空
真呂

船起せん風の大洋
美奈子

唳々とトランペットを競ふらん
守男

味が自慢のプレインオムレツ
如代

軒端の月を遊ばす蚊遣香
弘子

男絶ちたる羅の女
啓子

周波数やつと合ひたる嬉しさよ
奈

菌型携へ向かふ被災地
男

たゞならぬ気配察せし象の耳
奈

四面の壁に守護の神々
啓

アングラバーゴスペルソングしみじみと
代

風船売りは道化師のやう
弘

行き先をうかと忘れて花に逢ふ
啓

霞棚引く遠き山垣
奈

ガウデイの夢限りなく築くらん
啓

聖家族から魔女も現る、か
奈

自分史の老いの展望定まらず
代

焚き火するにもお役所の許可
弘

ビジネスも家事も育児もそつのなく
弘

切れそで切れぬ間あひ絶妙
奈

許されぬ仲なればこそいや燃ゆる
弘

ちゝろ棲みつくパンプスの中
男

月のさす書架の傍辺の三彩馬
代

菊人形に霧吹きをする
啓

ミス터리ーツアーに期待つのでらせて
代

駅伝走者追ひつ追はれつ
啓

飛花落花鎮もりたたす忠魂碑
呂

曲水の盃流れゆるやか
男

連衆 鈴木美奈子 近藤守男 伊勢本如代
伊勢本如代

市野沢弘子 小池啓子

「群鶏図」 染谷佳之子捌

屠蘇酌むや床に若冲群鶏図
佳之子

初松籟の渡る颯々
文子

父と子で鉄道模型作るらん
珠枝

時計進むを早く感じる
良彌

短夜の月砕きつつ寄する波
澄子

君のほほ笑み夕顔のやう
ねえだけで好きなどころをそつと撫で

彌 恭子

「火の鳥」

大島洋子捌

花吹雪はぐれた夢を追ひかけん
八百八町なべてのどらか

洋 樹

生真面目が役に立たない外回り
合宿に行く荷物ほどほど

文 澄

火の鳥の羽ばたく空や初茜
ラクビー場で御慶言上

洋子

連衆 梅田 實 鈴木千恵子 青木秀樹

ブレメンメルヘン街道旅遙か
万国旗など飾るお菓子屋

文 枝

露の臺土の匂ひを煮含めて
雛飾りする幼子の笑み

千恵子

中村ふみ 紺野千寿子

神の峯絢爛の花仰ぎつつ
縋りてみたし佐保姫の裾

彌 文

ニューヨークにも決まる出店
限取の日本男子に一目惚れ

千寿子

「笑まひ多く」 生田日常義捌

大きな聖樹置きし玄関
露西亞よりかみなり魚のどつと来て

枝 彌

大川のほとりの小径地図になき
通販で買ふ収納の家具

実 樹

新宿や笑まひ多くて小正月
来客ごとに配る初刷

星の契りか淡白な彼
待宵に遠く聞こえる秋蛙

文 枝

散りやすき余花ゆゑそつとそつと生け
力絞つて叩く御器囀

同 樹

墨壺の糸直線を描くらん
檜の匂ひしるくただよふ

鎌祝ひして仕舞ふ農機具
金錢の感覚少しルーズです

彌 同

燗酒を酌みこころほどける
年下に宝石ねだるかじけ猫

実 樹

C Dのグレコの唄に月涼し
玉虫ひとつくれる掌

夢を見てゐた嬰のお目覚め
紙皿に煮染めを分ける花の下

文 枝

女性起業家夫を踏み台
地震しきり地軸のずれの進みたり

同 樹

二坪ほどの町屋ギャラリ
私もまた物の怪となる花の闇

春のシヨールで記念撮影
連衆 橋 文子 花巻珠枝 佐藤良彌

文 澄

城址の堀に落ちる団栗
ハロインの行列に月従ひぬ

同 樹

赤・青・黄ぎつしり並ぶ染卵
隠れん坊がカーテンの裏

八角澄子 式田恭子

澄 之

秋湿りして痛む関節
池の鯉先祖返りの文様も

同 樹

語りて止まぬ「恨」の伝承
とろとろと者詰めるジャムの冬母

池の鯉先祖返りの文様も
ガーデニングは和風テイスト

文 澄

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

同 樹

ちよると口説いて咳でごまかし
先の世は遊女であったかも知れず

萩のこぼる庭の踏石

月上げて鎌倉の谷戸鎮もれり

鹿のソテーでボジョレヌーボー

後出しのグーで球団買ひました

老いの歩みは水ぬるむころ

瀬戸越えて空一面の花吹雪

扇に躍る数多てふてふ

連衆 原田千町 武村利子 池田やすこ

滝沢三実

花静か園遊会の輪を外れ

母譲りなり刺繍春服

襲名は弥生狂言勘三郎

追っかけツアーニューヨークまで

今何時ちらと眺める腕時計

炬燵の猫は出るつもりなし

先斗町裏返されて足袋の列

白き項にかるき唇つけ

大好きになつてしまつた毛むくぢやら

弁慶草の風のさゆらぐ

笛の音の近づく気配居待月

だらだら祭のバイト引き受け

プレスII新バージョンが欲しくつて

朝寝さめこむ爺さんの横

しつとりと花のうるほふ中日和

霞のさきは山裾の駅

連衆 本屋良子 松島アンズ 古賀一郎

古賀幹子

月照らす軒端に下がる割大根

埋み火ふうと吹けば頬燃え

髪形はあなたの好きなソバージュに

絆の糸の先をまさぐる

巴里行きの直行便は満席で

フルートグラスシャンペンの泡

若社長記者会見の意気盛ん

この靴下の色がよきかと

繋がれし馬おとなしく花万朶

阿吽の像の霞む山門

弥生野を減量めざしランニング

ロールスロイスさつと追ひ抜く

くの一がにんまりとして五番街

思い通りにならぬ二股

アイスクリン食べさせてやる古稀の尉

許してならぬ原爆の罪

おのが手の生命線をなぞりみる

あんたも少し丸くなつたね

溢れ蚊の打たれてよると月細し

南京豆が通勤の友

冬支度バーゲンセール心待ち

原稿用紙特注の銘

開拓の村に初めて花咲けり

おおむらさきを追ひて海峡

連衆 豊田好敏 村田富美 青木泉水

横山わこ 西田一枝

幹 や 幹 郎 良 ア 良 や 良 郎 や 良 ア 良 良 幹

富 男 泉 こ 敏 枝 泉 男 敏 泉 こ 敏 富 泉 富 敏 富 こ 枝 泉 こ 泉 一 枝 わ こ

「赤い角」

中林あや捌

赤い角ひとつ添へたり寝枕

蓬萊飾盛りし三方

東の海平らかに船出して

キャブテン席でキャビアいただき

月皎と夏手袋の忘れ物

昨夜の記憶さそふ香水

告白は酒の力を借りながら

ザツクのなかに眼鏡いくつも

かしづきて隠れマリアのおん愁ひ

まだ畳敷き島の教会

当りさう新札で買ふ宝くじ

雁の帰るを手庇に見る

あや

良子

アンズ

一郎

幹子

郎

良

ア

良

幹

ア

良

「ふるごとく」

林鐵男捌

ふるごとく吉事あるらし千代の春

遥かに望む美しき初富士

久闊の電話の声の弾みあて

じゃれつく犬とボール蹴る子ら

鐵男

好敏

富美

泉水

幹 や 幹 郎 良 ア 良 や 良 郎 や 良 ア 良 良 幹

初捌の思ひ出

杉内徒司

円熟社主催根津芦丈翁一周忌追善会俳諧(昭和四十四年二月十六日)の参加者は四十七名。東京からの参加者は私一人だけなので、始まる前まで、寒い広間の隣室の置炬燵で、私の相手をしてくれたのは、宮脇昌三氏だった。

宮脇氏は明雅氏と東大国文科同期の方。伊那の神主さんの息子さんだが、中学は東京府立四中出身なので、私の接待役になったらしい。この日の縁が基で、後年宮脇氏の、田子檀、亀村宏、矢羽勝幸三氏との労作『加舎白雄全集』上下巻(昭和五十年三月三十一日刊)出版記念会を私が東京で主催した。

さて、追善俳諧では、明雅氏が執筆を勧めたのを覚えている以外は何も記憶していない。私の連句の師の三井武翁の遺稿集『朴の花』の出版報告会を昭和四十五年十月十七日(土)有楽町の農林中央金庫二階の会議室で開催した。出席者は、武翁の経歴を語るように、日銀副総裁、農林次官等の三十余名だったが、故人の所属していた俳文学会からは東明雅信州大学教授一人だけだった。

後刻知ったのは、その日は俳文学会例会が鹿兒島市で開催された日だったから、学会関係者が見えなかったのは当然だったが、それでも参加下さった明雅氏には有難いと思つた

ので、終つてから帝国ホテルへ誘つて労を謝した。

明雅氏は芦丈師が勲五等瑞宝章を享けたのは、三井武翁氏の御尽力のお蔭だと礼を述べられた。私は二年がかりの大役を果してホッとしていたから、もっぱら聞き役だったが、最後に、捌きを何回くらいしたかと聞かれた。

私共は、昭和四十一年七月から四十三年九月の間連句を教わった。その間グループの名称は無く「三井氏の会」とか「三井社中」とか云つていたが歌仙二十巻、半歌仙二巻を収録した遺稿集『朴の花』を編纂する時初めて「中金連句会」と名付けたものだった。

その三年間の捌は専ら武翁師が担当したので、私は捌いた事はないと答えたら来月の三日松本へ来ないか、信大連句会で捌かせてやると云はれたので御好意を承けることにした。十一月三日、新宿を早朝に発ち、一時四分松本着、信州大学東研究室を訪ね、車中メモしてきた三句を見せ、発句を選んでもらった。

冬の日やヒマラヤ杉は五十齡

信大に連句巻く幸文化の日

信濃路は落葉松林黄に染みて

私は緊張して歌仙を首尾、何か御意見は、と述べた。すると、高橋玄二郎氏が、今日の歌仙は音が多いねと云はれたので、頭の中が白くなった事は今も覚えている。

さて、貴重な体験をした初捌歌仙は手元にはない。明雅さんも、玄一郎さんも逝かれて仕舞つたので聞く人もいない。記憶しているのは、この歌仙は「信大連句八十号」に掲載ということだけだ。

註

円熟社 蕉風伊勢派七代目馬場凌冬が明治二十年代に興し、俳諧を広めた。

三井武翁 俳人連句作者 明治四十四年(1911)〜昭和四十三年(1968) 本名武夫 農林中央金庫副理事長

昭和三十年から連句を始め、同四十一年から中金連句会主宰 遺稿集「朴の花」

朴の花咲けり林道曲折す

信大連句会 昭和三十六年、根津芦丈翁が信州大学文学部で講演、実作指導をなしたのを機に誕生。東明雅 高橋玄一郎 池田魚魯 小出きよみ 藤森雪溪 藤松素香 細田高夷 望月紫晃 田淵芹川 倉科溪水などがメンバー

初捌きの記憶

峯田政志

明確な初捌きの記憶は無いが、近いと思われる頃の印象として、若君のような連句の先輩に指導されながら巻いた二十韻である。

丁度その年、大阪の花の万博が開幕し、バブル崩壊の直前の頃だった。この直後からACCに通い始めた。教材は明雅先生の肉筆プリントではほぼ満席、すっかり魅せられて十年通った。勿論ACCも若君のような先輩に教えて貰った。その後何度も捌きをさせて戴いたが生来の怠け癖で、「文台引き下ろせば、すなわち反故也」を手がかりに創作と享受の一体性こそなどと考え、あまり作品に手を入れたことは無かった。しかし、今となって考えれば、校合についての明雅先生のご教示通り磨きをかけ、鉦目を取る努力こそ、連衆へのご恩返しではないかと反省しきりである。

ただ一度、とても楽しい経験がある。捌きの厳しい役割を承知の上でしかも怠けるチャンスが巡って来た時である。こんな事はもう二度と無いかも知れない。右脇にA宗匠、左脇にB宗匠を戴き、連衆の出句を見て貰い、宗匠の句は別の宗匠と相談しながら治定するという形で殆ど校合の必要を感じないまま歌仙を巻いた。この時だけは、捌きはオーケストラの指揮をとる快感か、豪華客船の船長になった気分が嬉しかった。校合の責任が殆ど無くて指揮をとる気分浸れるなんて、そう何度もあるものではない。その後、百韻を捌

く機会を戴き、一度に十数句の出句に恵まれ完全に放心状態になるほど読みでのある句に参りましたの気分だった。どれも佳句だ、結局句数のバランスで採る羽目になった。明雅先生の、甘い点者の存在は俳諧を墮落させるという言葉は今も心に深く染み渡り、捌きの重大な責任に思いを致す次第である。しかし、百韻の捌きの経験は貴重で、歌仙を捌くことが重荷に感じなくなったことは有り難かった。是非チャンスがあったら百韻をお捌きあれかしと思うこの頃です。

初めての捌き

繁原敏女

何か面白そう！ 軽い気持で、ころも連句の座に入れて頂きました。ルールなどさっぱり解りませんが、とても楽しい時間を過ごさせて頂き、月一回の例会を楽しみに出席してきました。

一年くらい経った頃でしたかしら、藍さんから、捌をやってごらん下さい、との御言葉！ 大正生れの私は上の方からの御言葉には「はい」と答えるしか出来ません。不安と言いますより何も知らないのです。生来の人気な性なので先輩が助けて下さるからと、捌なるものをさせて頂きました。お仲間は全部先輩ですから、先輩の気配をじっと眺めて句を頂こうと決めてはじめました。多分、二十韻の捌だったと思います。付けの好し悪しも、

打越もまだはつきりと解らない頃でした。ただ、捌をしながら思いました事は皆さん私を楽しませて下さる、ルール違反の句は出さない。捌の取り易い句を出して下さる。そんなことが三分の一くらい進んだ頃から感じられました。自分の稚拙さも忘れ大変心地よく捌の時間を楽しませて頂きました。

巻き終えて覚えました事は、座の連衆は、皆楽しくお互いに助け合って、足りぬ分は補って下さる。

お互いに褒め合い、補い合う。

心くばりをして、なるべくルールを学ぶ。お蔭様にて、捌をさせて頂いて連句そのものの楽しさも知りました。それよりもっと大きな収穫は、連衆のルールを守る。心くばりをする。世間を知る。馬齢を重ねながら、知らないことの多い自分を知らされました。



「花の定座」の系譜をたどる

鈴木美奈子

連句や連歌を巻いていると「花」の定座が
いかに重要かを痛感する。何故かとして「花」
はなぜ「桜」なのか？古典初学の身には重い
テーマへの旅・これはほんの第一歩である。

久方のひかりのどけき春の日に

しづ心なく花の散るらむ 紀友則

ねがはくは花のもとにて春死なん

その如月の望月のころ 西行

敷島の大和心を人とはば

朝日に匂ふ山桜花 宣長

櫻はないのち一ぱい咲くからに

生命をかけてわが眺めたり 岡本かの子

桜の樹の下には屍体が埋まつてゐる

梶井基次郎

千万の人の死にゆく暁に

日本の桜あはれ散りゆく 岡野弘彦

「王朝の香しい桜」から「特攻隊の狂気の
桜」までのこの「桜観」の変遷。これを見る
と日本人独特の観念連合が桜と死との間にあ
つて、それが美意識の、大きく言えば文化の
基底となっているようにさえ思われる。

昭和十年『日本浪漫派』を刊行、その耽美
的パトリオティズムで戦場に赴く青年たちを
魅了した保田與重郎は、「花の思想」こそわが

民族の文化と文芸の系譜であると言った。一
方、こういう観方もある。

昨今、評価の高い岡野史観によれば、
「アジールの思想」が歴史のなかの民衆の見え
ない絆となってきたと言う。アジールとは
「無縁」(の場)のことであり、政権の交代や
主従の関係とは「縁」を切った人々の「平和」
な場であった。公界寺(くがいでら)や堺の
ような自治都市、楽市・楽座、非人「宿」な
ど・。ここに集う「平和」な集団とは勧進
聖・禅律僧・連教師・茶人・桂女(遊女)な
どの「芸能民」である。

市も立つ寺社の境内、すっぽりとした箕笠
のような枝垂れ桜の下で巻かれた「花の下連
歌」、そして身分をかくし一介の旅人として句
を連ねていく笠着連歌、この「花の下」こそ
アジール、無縁の民の「一味同心」(「一揆」
の場(座)であったと岡野氏は言う)。

この自由な「座」の思想が脈々と歴史の縦
糸として流れ来たって今日の連句が在ると思
うと実に嬉しい。しかし、何故「桜」なの
か？

原始桜は「生」と「再生」のシンボル

サクラの原義は、田の神を意味する「サ」
の居場所「クラ」で、花の下連歌は御霊鎮
魂Ⅱ花鎮めの祭りに関連があるとされている。
鎮魂にはタマシズメとともにタマフリの側面
があり、タマフリとは生命力を振り起こす蘇

生を意味した。

古来、聖木として信仰されていた桜が「生
と再生」のシンボルだったことは、木花開耶
姫(このはなさくやひめ)と瓊瓊杵尊(にに
ぎのみこと・稲穂の豊穰の意味を含む)との
婚姻という桜と米を結ぶ稲作栽培の発生神話
(日向神話・木花は稲の花との説もあるが)の
なかに現れているが、此処にすでに桜の「短
命性」が象徴されているという。開耶姫の姉
の磐長姫(いわながひめ)も共に娶れば磐瓊
のように長生きできるという父親の薦めを瓊瓊
が断ってしまったというのだ。それはともあ
れ、古代の人々は桜の短命性に暗い死の翳を
見てはいない。山の神が稲作を保護するため
に桜の花びらに宿り田に下ってきて田の神と
なり、そして秋、収穫祭で供応された後、山
に送り帰されるとされていたのである。

『万葉集』に桜の挿頭しの歌が載っている
が、今日、髪に稲穂を挿す風習も米と桜との
同一化を象徴しているようだ。

古代王朝の「宴」の花

古代の文献に「桜」という字が最初に使わ
れたのは紀記が成立する八世紀。『日本書紀』
の「履中紀」には、冬十一月磐余市磯池に宴
遊の船上、天皇(すめらみこと)の蓋に桜の
花が落ち、この桜の所在を探し求めて献上し
た連(むらじ)に稚桜部造(わかさくらべの
みやつこ)の名を与えたというエピソードが

載っている。

この最初の桜の記録が宴遊と結びついてたことは興味深い。『伊勢物語』の交野の桜狩りや『源氏物語』の南殿の「花の宴」、また「醍醐の花見」や歌舞伎の「助六」などなど、今日まで「花見」の風習として連綿と続く。

時に「婆娑羅」や「派手」に演出される桜は華やかなるもの、まさしく「花」であった。平安びとは散る桜にのちの果敢なさなど見てはいない。『古今集』で桜を歌った七十首のうち、満開↓落花を歌ったものが五十首といわれ、桜美の対象は「散りゆく桜」にあつたのであり、散る桜は次の年のいのちの甦りを告げるめでたき花、ととらえていた。春ごとに花のさかりは有りなめど

あひむ事はいのちなりけり 97
「生と再生の桜」はまた、女性の一生とも重ね合わされて、王朝女流歌人に多く詠まれた。小町しかり、伊勢しかり……。そこに「あはれ」はあるが、今日のような「哀れ」「憐れ」とは違い、華やぎの情趣を湛えている。

花のドラマツルギー

「花」と「月」の歌人といえは西行。しかの「春死なん」の歌は『新古今集』では、一八四五番で俊成とダブっていても括弧がついている。つまりいったん撰歌されながら切り出された歌。俊成が先にこの歌を評して「うるわしき姿にあらず」と和歌としては

正統と認めない立場を示していたと云われる。

西行は裾野のない個性的な単独者であり、もの狂おしいまでの桜への憧れを直截に歌う西行と定家とは対極にあつた。

見わたせば花も紅葉もなかりけり
裏のとまやの秋の夕ぐれ 定家

十九歳にして「紅旗征戎吾事二非ズ」と言い放つた定家は、「古今的」なる基層の和歌の世界をラジカルに変革する方法に辿りついていた。言葉だけの虚構の世界にイメージとしての色合いや匂いをもつまでに言葉を積分していく。定家『新古今』の斬新さは現代の美意識に近しく、疎句付けの感覚。事実、定家は連歌もかなり好んでいたと言われる。

そして西行の心情も有心連歌の心敬を通して季吟へ、芭蕉へと連なる一本の糸。二人をよく知る後鳥羽院は西行を「生得の歌人」と呼び定家を「歌の上手」と言いなしている。

「花実論」よりの「花」の解放のきざし

和歌神授の歴史のなかでの「花」の觀念とは、表現(詞)を花、内容(心)を実とする流れが従来あつた。これが世阿弥の「花」の思想においてこの思考枠組から完全に解放されてしまった、即ち、「風姿花伝」である。

能役者や地下の連歌師は、網野史観に戻るならアジールという遍歴の中世自由民を母胎としていた。文学と演劇という二つの領域の中間にある連歌が従来の「花実論」から離脱

していくのは興味深い。二条良基は「九州問答」のなかで、佳い連歌とは「ほけほけとしてみ深く幽玄の体」と「花々と花香の立てささめきたる体」がよいと推奨し、また「ただ当座の面白きを上手とは申すべし」と連歌はその場の面白さがすべてだ、と言い切っている。

良基が十三歳の美少年世阿弥に出会ったときは六十歳に近かったが、世阿弥(藤若と呼ばれる稚児であつた)を露を含んだ花のしおれをも上まわる美と賞賛している。稚児とは或る意味で境界や規範という束縛を超越した自由な存在であり、それが能という演劇空間に乱舞する夢幻の花を咲かせたと言えよう。

良基はまた日本ではじめての花合(はなあわせ)の主催者であつた。立花は稚児の教養の一つであつたから、世阿弥もまたこの花の宴に色を添えていたことであろう。

そして「座」という時間と空間の交差する連歌の「場」におけるドラマツルギーの主役とは「花」でなければならなかつた。良基と師である地下の連歌師・救済の手になる式目「応安新式」の成立は一二七二年、南北朝時代(あるいは室町前期)のことである。

ここで紙幅が尽きてしまったが、ここまでも、芭蕉の一句、

さまざまの事もひだす桜かな

の感慨が浮かんできて、楽しくもあり切なくもありの一文になってしまった。

参考文献として興味深く感じ、引用させていただきます。いただいた書を挙げてみます。

『桜の文学史』（小川和佑・文春新書）
『ねじ曲げられた桜』（大貫恵美子・岩波書店）
『十二夜―闇と罪の王朝文学史』（高橋睦郎・集英社）

『日本古代文学史』（西郷信綱・岩波全書）
『西行論』（吉本隆明・講談社文芸文庫）

『西行花伝』（辻邦生・新潮文庫）
『後鳥羽院』（保田与重郎全集第八巻・講談社）

『英雄と詩人』（保田与重郎全集第三巻）
『日本浪漫派批判序説』（橋川文三・講談社文芸文庫）

『無縁・公界・楽』（網野善彦・平凡社）
雑誌『国文学』（学燈社）

「連句のコスモロジー」 昭61年4月号
「中世の芸能」 平4年12月号

「花の古典文学誌」 平9年4月号
「連歌と能・狂言と」 平10年12月号

雑誌『文学』（岩波書店）
「特集Ⅱ連歌の動態」 02年9・10月号

西宮のえべっさん 花巻珠枝

主人の仕事の都合で関東、関西を行ったり来たりと言う生活を送り、又西宮に帰って来て三年が経とうと致して居ります。今回は当地のえべっさんをご紹介します。

西宮神社は大阪と神戸の二つの大都市には

さまれた、いわゆる阪神間の中央に位置して、背には六甲山、前には西宮の海と言うように海とは切っても切れない関係にあります。

関東では「えびす様」と言うようですが関西では「えべっさん」といい、皆に親しまれています。

このえべっさんは大変古くすでに室町時代には戎社（エビスノヤシロ）として又別名海社（ウミノヤシロ）と呼ばれていたようです。

この海社という表現は大変重要な意味をもっており、この神さまの性格を端的にあらわしているとの事です。

海のかなたからご神霊がご出現になって、これをお迎えして社殿をつくりおまつりを行ない、それにつれていろいろな伝承や行事等がながく伝えられて来たものと思われまふ。

したがって海のかなたから来られた神さまであるが故に、その始めはこの神さまを外つ国の神、つまり外国の神さまと思ひエビスと名付けて呼んだのですが、後になって古事記や日本書紀の神代巻に出て来る、イサナギ・イサナミ、二柱の神さまの御子として海にお流しになった蛭児神であることが分り改めて「海神蛭児神」と尊称して祀られることになったそうです。

ここに古来この地方に語り伝えられてきた、伝承をご紹介しますと、

昔鳴尾の浦「西宮東方三キロ」の武庫の沖で漁夫が夜漁りをしていたとき、そ

の網が平常よりもたいへん重く感じたのでよるこんで引上げて見たところ、魚ではなく奇しき神像のようなものがかかりました。漁夫は何心なくつぶやきながら海中に遺棄して、さらに沖遠く行くうちに、和田岬の辺で又網を曳いていると、

不思議や先ほど武庫の沖で見送った神像がまたかかったではありませんか、今度はただ事ではないと感付き、像を船にのせ家に帰って大切に祀りましたそうです。ある夜神さま託宣があつて「吾は蛭児神なり、国々を廻つてこの地に来たが、この地より西方に好きな宮地がある。そこに居らんと欲する、能く計らえよ」と教えられ、漁夫は驚いてこの夢の有様を里人に語つて一同の同意を得て、ついにさきの像を御輿にのせ西の方お前の浜をさして進みしばらく飯宮にとどめた後、その里人共々に相図つて好適地に鎮め祀つたのが現在の戎社即ち西宮神社なのです。

この伝承はいつ発生したのか良く分かりませんが、エビスの神が海上渡来の神であり海辺漁人によつて祀られた神である事を物語るものでありましよう。

阪神方面においでの際は足を伸ばして見ては如何でしょうか、そして福を沢山さずかって下さいませ。

いらしてください

源心庵の会 篠原達子

平成四年一月発会、江戸川区行船公園内「源心庵」出席者五名。私それ迄の準備経過を知らないのですが、あの頃は実作の場が本当に少なかつた、それで計画されたようです。

初心者を中心にとなたでもどうぞ、捌は順に回して勉強、という会です。次第に人数が伸び、十一月明雅先生のご来席を仰ぎ、翌五年十一月には新形式「源心」発表がなされ、驚きと感激でした。

この会は今年で十四年、旅行も忘年会もせず専ら連句で続いているのは、連句好き同士の親愛協力の故と思っています。

私達は新入会員を常時待っています。来て下されば会もあなた様も良い意味で少し変わるかも。初心の方には補佐役をお付けします。

実作会

凡そ二十〜二十八名、四卓〜五卓。その月の出席名簿の見当がついたら前もって捌をお願いします。記録表に依り出来るだけ公平に捌を回すように努めています。

席割 トランプで(例外の月もあり)

形式 捌にお任せ()

連句の席はどこも同じ、盛り上ってくると賑やかですが、手狭な部屋だったりすると大

変で各卓接近互いに一層大きな声になります。

隣室から「お静かに」の使者が来た場合は、係は「スミマセン」と低頭するのみで皆さんには伝えません。連句は楽し、連句好きしか居ないのだから静かになるわけも無し、そのうち隣り部屋はお帰りになります。

日程と会場

例会は毎月最終水曜日としていますが、会場取りがうまくいかない時があります。一週繰上げたり、会場変更の場合もありで、日程と会場お知らせプリントを出しています。

青山へ東京ウイメンズプラザへ

年間最も多用の会場。都民と行政が協力し、男女平等社会の云々とか、ジェンダーとか、ドメスティック何とやら、外国人も多い建物です。連句会が借りるのはちょっと特異らしいです。私達は連句で男女平等を実現している。

交通よし、洋室・洋トイレ・エレベーター。〈日本橋区民センター〉

日本橋公会堂の二階に併設。青山と同じく設備よし。昨年夏、大きな部屋を全日獲得し熱田への百韻三巻。珍しいお顔も見えました。〈源心庵〉

観月連句はここが最高。広いお庭が結構です。潮入の大池に面して月見台のある平屋、数寄屋造り、手洗は洋式。

行船集

年一回出す手作りの作品集。初めは製本作業を皆でお祭みたいにやりましたが、頁も部数もだんだん増え、現在は製本だけをプロに頼んでいます。

年間スケジュール

- 四月二十七日(水)十一時 千円と弁当持参 東京ウイメンズプラザ 例会
- 五月二十五日(水)十一時 千円と弁当持参 東京ウイメンズプラザ 例会

以降は予定

- 六月 東京ウイメンズプラザ 例会
- 七月 東京ウイメンズプラザ 例会
- 八月 日本橋区民センター 出盆過ぎ、暑気払いお楽しみ連句
- 九月 源心庵 お月見 待宵、名月、十六夜のいずれかに

開催 十月 明雅先生三年忌追善

問い合わせ 〒一七四一〇〇五三

板橋区清水町六八一四

FAX

〇三二三九六一一五五五四

篠原達子

伊勢派散策⑤ 「八木芹舎」 橋 文子

最後の旧派

種山氏。山城国（京都府南部）八条生れ。

（一八〇五〜一八九〇）明治二十三年没

俳諧を成田蒼虬に学び、洋水園と号した。

江戸時代末期の俳諧を支配したのは、炭俵蕉風の諸派である。天保三大家と称される京都の南無庵蒼虬、江戸の自然堂鳳朗、梅室素信一門が全国的に人気を保っていたし、地方に古い地盤のある美濃派も勢力を有していた。

明治になって、京都双林寺を背景とした蒼虬門の花の本宗匠は確固とした地位を築いてをり、芹舎は元治二年（一八六五）二条家から「花の本宗匠」の号を受けた。

「花の本宗匠」の称号はその昔松永貞徳に与えられたものだったが、こちらは、寛政二年（一七九〇）九月に始まった二条家俳諧に、加藤暁台、江森月居が招かれ、百韻を興行し、「蕉翁の俳諧を御取立の事に候」として、二人に与えられたものの流れで、その免状には「中興之器」の語が見えるそうである。

明治元年（慶應四年）「俳家新聞」が発行された。しかし、新聞とは名ばかりで、体裁は全く従来の月並の摺物と同一だった。句は三都判者をはじめ地方に名のある者を集めている。この中の芹舎の句

窓明て雛のぞかせよ三日の内

俳人生活は、明治になっても前代と同じく点料で維持されたが、維新後暫く経済的恐慌で、市民は投句どころでなく、宗匠は収入減で苦しんだと言われている。

明治政府は、明治五年十一月九日、太陰暦を廃し、太陽暦とすることを布告、十二月三日を以て明年一月一日とした。これによって歳時記は大変革を来す。

また、同年、政府は社会教化をめざし、教部省に教導職を置く（十七年には廃止）ことを決め、神官、僧侶の他、俳諧師をも加え、試験及び推薦によって任命した。任命された者は、結社を創立、勢力拡大をはかったので、俳諧は盛んになったが、二十年代を中心に俳壇は旧派と新派に分かれて行く。

上方を中心に、すでに旧派の大家であった芹舎は、教導職には関係無かったが、実用実利尊重の世の中に、半日の閑を得、清談雅遊によって鬱を散ずる俳諧の良さを広めていた。

明治四年正月に出された「蕉俳位付」という表によると百五十六人の全国の俳諧師が、相撲の番付表のように東西に分けられ、それが皆アメリカの通貨ドルで評価されている。東方の千ドルは当時人気第一の京都の芹舎、西方は大阪の高松蟻兄が千ドル、勳進元は東京の関為山が千ドルとなっている。

見ぬ年も飽くとしもなし梅柳
なつかしきほどの寒さよ花の朝

芹舎

春の水何処によどみもなかりけり
牛荒れて四五本折りぬ鶏頭花
闇をふく風も見ゆるよとぶ堂
行秋や入日の末の鳥おどし
我も冬忘るる日あり返り花

たまたま着れば重き綿入

凌冬

餅搗をはやう仕たとは先手柄

那美女

誰ても誉てよき隠居なり

幻史

縦横に金桶青き角屋敷

芹舎

「俳諧目に立つ塵」より

京都市東山区高台寺の塔頭月真院（京都バス、市バス「東山安井」下車）の門前、土塀を背にして「御陵衛士屯所跡」の石柱と並んで句碑が立っている。

芹舎

見 阿可努与

ミぬ日もなく天

ひ 可し 山

（見あかぬよ見ぬ日もなくてひがし山）



佛や花に忘れぬ事ばかり
雉のほろろにしばし佇む

芹舎
文子

